

# ノンテリトリアルオフィスにおけるパーティションの選好

長光 翔一

Shoichi NAGAMITSU

## 1 はじめに

現在、一般的なオフィスの座席レイアウトは島型対向式である。このレイアウトは管理・分業・階層化という概念を元に考案されたものであると考えられている。高度経済成長期においてこの概念は重要であったため広く普及し現在まで続いている。しかし、近年オフィスにおいて求められているものは、独創性の高い企画やアイデアの創発などへと変化している。そこで新たなオフィス空間が求められており<sup>1)</sup>、ノンテリトリアルオフィスと呼ばれる、オフィス内のデスクや設備、スペースを個人ごとに割り当てず複数人で設備を共用するオフィス計画手法が登場した<sup>2)</sup>。ノンテリトリアルオフィスを導入することで、利用者の好みや気分を考慮して座席を自由に選択でき、また固定席のときよりも多くの人と交流をもつことによって知的生産性の向上が期待されている<sup>1)</sup>。

しかし、ノンテリトリアルオフィスを導入することで新たに懸念される課題がある。まず、各執務者同士が容易に交流できるために、集中して作業を行いたい執務者が集中して執務を行えないという問題が考えられる。これにより、オフィス内での作業効率の低下が懸念される。

次に、同じ机を複数人で使用する場合に、隣の執務者との執務空間の境界が明確でない場合が考えられる。そのため、必要以上の執務領域を取りやすくなり、隣の執務者の執務領域を狭めてしまうという問題が考えられる。

そこで本実験では、それらの課題を改善するため、執務内容に合わせてパーティションを設置し、執務者に対する執務快適性への影響を検証する。

## 2 パーティションの高さ選好実験

### 2.1 パーティションの高さについて

様々な高さのパーティションを設置し、執務者に対する執務快適性への影響を検証する実験を行う。

島型対向式のオフィスでの検証では、高さのあるパーティションを導入することで集中作業を快適に行うことができるという結果が報告されている<sup>3)</sup>。また、30 cm 程度の高さのパーティションを設置することで、正面に在席する執務者とのコミュニケーションも取りつつ、執務も快適に行うことができるとの報告もある<sup>3)</sup>。しかし、高さのあるパーティションをすべての座席に導入することで、数人で行うブレインストーミングのようなコミュニケーション形態が取りづらくなり、ノンテリトリアルオフィスの目的である知的生産性の向上を妨げる可能性がある。

そこで、本実験ではパーティションの高さを 4 段階用

意し、検証を行った。以下にパーティションのおおよその高さとその意義をまとめ Table.1 を示す。なお、以下の Table.1 に示す高さは目安であり、本実験で重要視すべき点は意義であるため必ずしもその高さのパーティションである必要はない(以下同様)。また、0 cm はテープで執務領域を分けた。

Table1 パーティションの高さとその意義

高さ (cm)	意義
0	執務領域の明確化
10	隣の執務者の手元が見える
30	隣の執務者の手元が隠れ、対面する執務者の目が見える
50	対面する執務者の視線が隠れる

### 2.2 実験概要

また、実験環境として同志社大学香知館 KC104 のノンテリトリアルオフィスを使用し、実験期間は 2012 年 11 月 5 日から 11 月 18 日まで評価実験を行った。被験者は知的システムデザイン研究室に在籍する学生 34 名(年齢は 21 歳から 25 歳まで)である。本実験室で使用した執務エリア(以下、実験エリア)のレイアウト図を Fig.1 に示す。また、実験室内に設置した各高さのパーティションの写真を Fig.2 から Fig.5 までに示す。

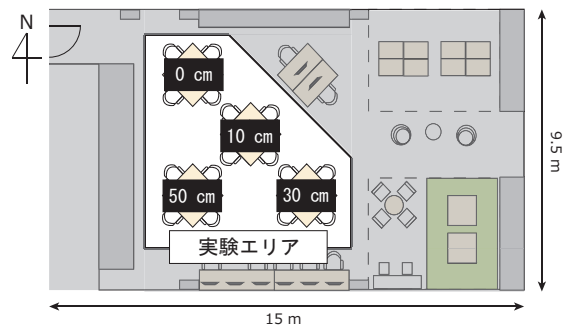


Fig.1 実験室のレイアウト図



Fig.2 0 cm

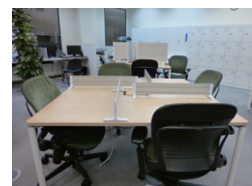


Fig.3 10 cm



Fig.4 30 cm



Fig.5 50 cm

また、ディスプレイの有無が執務快適性に大きく関わっていることが予備実験の結果より明らかになっている。よって、執務エリアの机にはディスプレイは設置せず、必要なときにディスプレイを自ら設置するというルールを設けた。これにより、座席選択を行う際、選択肢からディスプレイの有無を外すことができる。

これらの事項に関して、被験者には実験終了後にアンケートを行い、パーティションの高さが与える執務快適性への影響を検証する。

### 2.3 実験結果

快適に執務できたパーティションの高さの選考結果を Fig.6 に、あまり快適に執務できなかったパーティションの高さの選考結果を Fig.7 に示す。有効回答数は 30 で、そのうち 9 名が実験エリアを選択しなかったため今回は除いた。

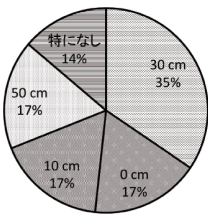


Fig.6 快適な高さの選好結果

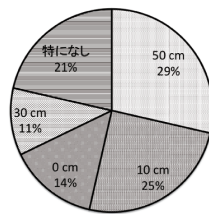


Fig.7 快適でなかった高さの選考結果

アンケート結果より、30 cm が好まれる傾向があることが明らかになった。30 cm のパーティションを好む理由として、圧迫感がなく作業に集中できるからという意見が多く見られた。また、近接する執務者の顔が見れる高さであるため、近接する執務者と会話しやすいという点でも評価が高かった。また Fig.7 から 0 cm のパーティションが次点で好まれる結果となった。理由として、開放感があり会話しやすく、また執務領域を広く使用できると感じるからという意見が多く見られた。しかしテープで仕切られているために、他人の執務領域に自分の荷物等が侵入しないように気を配ってしまい、ストレスに感じるという意見も見られた。

50 cm や 10 cm はあまり好まれないことが明らかになった。50 cm のパーティションを避ける理由として、圧迫感および閉塞感を強く感じてしまうため作業しにくいからという意見が大多数であった。しかし、少数ではあったが閉塞感があるために作業しやすいと回答した被験者もいた。10 cm のパーティションを避ける理由として、中途半端な高さであり、0 cm に比べパーティションの領域が狭く感じてしまうからという意見が見られた。

また、本実験期間中に実験エリア内でディスプレイを使用した被験者の割合は Fig.8 に示したとおりである。そしてディスプレイを使用した際に、快適に執務を行うことができるパーティションの高さのアンケートを行った。その結果を Fig.9 に示す。

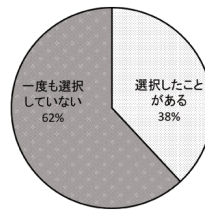


Fig.8 ディスプレイ使用者の割合

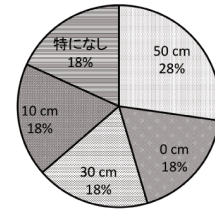


Fig.9 ディスプレイと高さの選好結果

Fig.8 からわかるとおり、あまりディスプレイが利用されなかったことが明らかになった。被験者が利用しなかった理由として、自席にまでディスプレイを持ち運ぶのが面倒と感じたからという意見が多く見られた。また、Fig.9 で強いてあげるなら 0 cm が好まれる傾向があることが明らかになった。その理由としては、パーティションとディスプレイで執務領域の多くを使用してしまうために、執務領域が狭くなってしまうという意見があった。しかし、パーティションの高さがディスプレイの高さを超えないために、それが気になると答えた被験者もいた。

### 3 考察および今後の展望

実験結果から 30 cm および 0 cm の高さのパーティションが好まれることが明らかになった。しかし、30 cm および 0 cm の 2 種類のパーティションを選好する理由が「集中できる」と「会話できる」という正反対の意見であった。またその時の執務内容はともに PC を用いた論文執筆やプログラミングであったこともアンケートから明らかになっている。このことから、パーティションの高さを執務エリア内で均一化せず、必要なときに必要な高さのパーティションを用意するか、執務者が必要な高さのパーティションが設置された席へ移動するかといった方針で研究を進めていく必要があると考えられる。また、50 cm のパーティションを使用した際の圧迫感や閉塞感を感じてしまう問題は、執務領域を広げることで解決できるのではないかと考えられる。よって、パーティションの高さと机上の執務領域の広さとの関係を検証していく必要があると考えられる。

#### 参考文献

- 岡本: コミュニケーションマネジメントによる知的生産性の向上; 知的生産創造, Vol.7, No.1, pp.93-101.
- 鈴木: 時間、場所から解放された新しい働き方; 電子情報通信学会技術研究報告, Vol.96, No.70, pp.19-25, (1996).
- 白石光昭: オフィスにおけるローパーティションのワーカーに及ぼす影響: 対向式レイアウトを中心として; デザイン学研究, 日本デザイン学会, No.95, pp.25-30, (1993).